── 巻頭特集 ──

アジアにおける平和構築に関する考え方：

いかにしてアジア地域に平和を生み出すか
（サマルカンド平和と連帯の国際博物館とその提携先の事例を考察して）

ウラジーミル・イオネソフ
サマラ国際文化研究会創設者兼会長

1．文化的現実としての博物館：アジアの文脈

第一に、平和博物館は文化的現実として捉えるべきものである。アジア世界は広く多様だが、その諸文化と人々の間にある一切の違いをもってしても、東洋にはそれと分かる普遍の共通点があり、それが独自の色あいや特徴的な生活様式、文化様式、独特の景観を生んでいる。何が東洋の文化のアイデンティティ、独自性、認識可能性を構成しているのだろうか。それは何より、その固有の顕著な装飾物（装飾性）にあると考えられ、それは思考、言葉、行動の独特な構造の随所に見られる。東洋の日常文化において、すべては衣服、装飾、慣習の美学によって枠組みが与えられている。

東洋のもう１つの特徴は儀式尊重主義である。そこでは人間は一直線に真実に達することはできないが、儀式的－象徴的な転換と移行、倫理上の調停、距離を通じてなら到達することができる。

個人を取り巻く現実は直接認識されず、世界のイメージを通じて、つまり暗喩、寓意、象徴によって認識される。そのため東洋文化では、平和と創造の道は装飾性（装飾物）と儀式尊重主義の中にある。それに加えて社会劇が儀式性によって和らげられる場合、新たな秩序が装飾によって満たされ承認されると、望ましい世界が具現化され、必要な調和が形成される。アジア文化における平和の調和はさまざまな方面に広がっている。装飾性は生活をより密で理解しやすいものにし、儀式は過酷な現実を一定の必要な距離に留め置いて、人が現実に痛めつけられないようにする。装飾と儀式のおかげで、東洋文化圏の人は常に慣習の美に囲まれているため孤独を知らない。西洋文化の場合のように平和が達成可能な戦略、長い克服と変化の結果なら、人はその実現を目指して奮闘しなければならない。一方東洋人にとって平和は今ここで人を喜ばせ、触発するものである。

> 平和への道はない。平和こそが道なのだ。
> There is no path to peace. Peace is the path.
> マハトマ・ガンジー

東洋で平和構築の実践を推進する際にはこういったことをすべて考慮しなければならない。国－文化の特質に訴えかけることにより、博物館は行動の民族的ステレオタイプを創造の源および平和構築活動の社会的に意義あるプロジェクトに転換することができる。この場合、平和博物館は最も今日的な人道的実践への参加に成功し、諸文化間の調和と和解にとって有効な社会機関となる。

2．現代における人道分野の学問の主題（対象）としての平和博物館

平和の博物館化という問題の修史はその価値ほど豊富ではない。研究者たちは平和を構築す

る博物館の実践を主に社会的暴力、紛争、軍事の歴史の文脈で考察しているが［安斎・林田・木村 2018; Anzai, Apsel, Sikander 2008; van den Dungen 2016; van den Dungen, 山根 2015; 山根 2009］、一部の研究では博物館設計の理論と実践の問題が提起されている［Anderson 2012; Crooke 2006; Golding, Modest 2013; Hein 2012; Ionesov, Ionesov 2017; Lindauer 2006; McKenns-Cress, Kamien 2013; McLean 1993; McLean K., Pollock 2007; Shirky 2008; Weil, 2002; 山根 2006］。文化的知識の文脈では、戦争と平和の概念の適格性を再確認するという課題が提起されている［Apsel 2016; Barrett, Apsel, 2012; Bedford 2014; Ionesov 2015; Jenkins 2006; Pachter, Landry 2001; Schirch 2014; Simon 2017］。現代の研究者は概して、平和構築プロセスの設計における新たなコミュニケーション戦略を、また文化的価値として平和を表象する視覚的モデル化と創造的体験に関する実際的な意味のある技術を発展させる必要性を強調している。これらの著者たちは、博物館スペースの作品とイベント豊富な映像上映の機会を拡大することの意義を指摘しており、そこでは物と人が現在の差し迫ったニーズに関する重要な会話の参加者としての役割を果たす［Art Council England 2013; Bensaid 2011; Bishop 2013; Carey 1989; Conflict Transformation 2014; Crossick, Kaszynska 2016; Harman 2005; Genoway 2006; Jarman 2017; Ionesov, Ionesov 2015; Ionesov, Kurulenko 2013; Norris, Tisdale 2013; Roberts 1997; Romano 2015; Schirch 2004; Simon 2010; Smith 2006; Sontag 2003］。

平和構築の分野で博物館活動の戦略立案と調整を行う主要組織である「平和のための博物館国際ネットワーク」（INMP）（https://sites.google.com/view/inmp-museums-for-peace/ 参照）の出版物と企画は、平和の博物館化の実践に関する研究に非常に役立つと思われる。INMP の活動は現在、世界中の多くの博物館や組織をつなぎ、平和と非暴力の思想を奨励している。同ネットワークは平和の問題に関する理論研究と実践志向の研究の両方を集積し、博物館による平和構築運動の発展に関する国際フォーラムやテーマ別討論の場を定期的に設けている。肝要なのは、平和のための博物館国際ネットワークがその文化、つまり認識可能なイメージ、世界秩序の理念、その伝統、社会的・芸術的実践、教育プロジェクト、出版、象徴的属性、そしてその専門的創造力の言語までもうまく作り出しているということである。同組織は平和構築という使命の遂行と社会的に意義ある構想の推進に必要な効果的ツールを獲得しており、その文化の創造自体が素晴らしい資産である［Ionesov, Ionesov 2017］。

3. アジアの平和博物館研究に関する主なトピック

アジアの平和博物館とそのコレクション、プロジェクト、そして成果は安斎・林田・木村（2018）、A.Ionesov, V.Ionesov（2014）、Sh.Khateri（2008）、A.Kimijima, J.Vidya（2013）、S.S.Mehdi（2005）、坪井（1999）、山根（1996; 2006; 2009）などの研究で取り上げられている。それと同時にこれらの研究の範囲には、地域社会における平和維持の問題、武装解除の一般的問題、記念活動、社会設計、ボランティア活動の事例が含まれる。博物館のプロジェクトは多様であるにもかかわらず、多くの著者の論考において平和は主に、戦争と暴力の犠牲者についての記憶、また記録された証拠の公開展示と戦争関連の歴史的出来事の再構成を通じた過去についての知識の永続化として位置づけられている。しかし近年では異なる傾向も認められる。多数の出版物が、博物館の教育活動および社会とのかかわりの技術という社会的側面に焦点を当てているのである［安斎 2012; Ionesov, Ionesov, 2014; Kimijima, Vidya 2013; 山根 , 2006］。平和博物館はこの観点において教育的プラットフォームとして機能し、知識を必要とする人々を啓発し、支援している。アジアの平和構築実践の研究者たちは、社会的に重要な価値を中心として人々の連帯を図る多様な博物館のシナリオを提示し、それと共に同地域における社会の不公

正、貧困、暴力への対策という喫緊の課題の解決に向けた見通しを概説している。

その結果日常の文化において、東洋と西洋とでは平和博物館の社会的使命についてのアプローチと人々の認識に違いがある。アジアでは伝統的に平和はどちらかと言えば伝統、ステレオタイプ、および合意され認識された世界秩序の社会的－美学的イメージによって固定されたものとして理解されるが、西洋では紛争と暴力を制御し新しい価値を啓発する変化可能な戦略、テクニックである。山根和代がその論考「Peace Education through Peace Museums」でデータを挙げている。「平和博物館のわずか16％が平和博物館創設の目的は“非暴力という考え方を普及すること”であると回答し、わずか9％の平和博物館がその目的を“紛争解決能力を鍛えること”だと回答した」「非暴力と紛争解決という考え方は、西洋諸国の平和博物館の方でより強調されているようだ」「つまり、歴史教育は日本の平和教育において強調され、紛争解決能力は西洋の歴史博物館で強調されているようだ」[山根 2009b: 147]

4. アジアの平和博物館とその活動の類型

アジアの平和博物館をその活動面で考察してみよう。最も一般的な意味で、平和博物館にはいくつか顕著な類型がある。

1. ユニバーサルミュージアム
2. 兵器の博物館
3. 戦争および暴力の犠牲者の博物館
4. 平和推進者（平和構築者）の博物館

ユニバーサルミュージアムはその活動において、平和構築の一般原則、実践、人工物の展開を図る、言い換えれば一切の社会的多様性の中で平和の文化を表象する。アジア地域におけるこの種類の博物館には、サマルカンド平和と連帯の国際博物館（サマルカンド、ウズベキスタン）、テヘラン平和博物館（テヘラン、イラン）、平和と人権のための子ども博物館（カラチ、パキスタン）、国際平和ミュージアム（京都、立命館大学）、神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）（横浜）などがある。

兵器の博物館は、戦闘用の武器の歴史と文化を専門とし、兵器は、a）平和を守護する物かつ勝利の象徴、またはb）死の道具かつ決して繰り返してはならないことを思い出させる記念物として位置づけられる。最初の分類には、中国人民革命軍事博物館、中国民兵武器博物館（北京、中国）、ベトナム軍事歴史博物館（ハノイ、ベトナム）、インド空軍博物館（パラム、ニューデリー、インド）、ラオス人民軍歴史博物館（ビエンチャン、ラオス）などがある。2つ目の分類は、例えばカンボジア地雷博物館（シエムリアップ、カンボジア）などに当てはめることができる。

戦争および暴力の犠牲者の博物館は、視覚的翻案により、戦争で亡くなった人々に関する劇的な歴史上の出来事の記憶に永遠の命を与え、人道に対する犯罪に焦点を当てるよう設計されている。この活動方針を持つと考えられる博物館には、アルメニア人虐殺博物館・ツィツェルナカベルト・アルメニア人虐殺記念複合施設（エレバン、アルメニア）、トゥール・スレン虐殺博物館（プノンペン、カンボジア）、広島平和記念資料館（広島県）、長崎原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館（長崎県）、日本二十六聖人記念館および記念碑（長崎県）、解放戦争博物館（ダッカ、バングラデシュ）、タイ―ビルマ鉄道センター（死の鉄路）（タイのバンポンからビルマのタンビュザヤ）、南京大虐殺遇難同胞記念館（南京、中国）、中国人民抗日戦争記念館（北京、中国）、韓国戦争記念館（ソウル、韓国）、韓国独立記念館（天安、韓国）、ノグンリ平和公園（ノグンリ、韓国）、戦争証跡博物館（ホーチミン、ベトナム）、ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ平和博物館（ナグプル、インド）、政治的迫害犠牲者記念博物館（ウランバートル、モンゴル）、ハラブジャ記念碑および平和博物館（ハラブジャ、イラク）などがある。

平和推進者（平和構築者）の博物館、あるいは個

人を顕彰する博物館では、その展示で人道主義文化の偉人による平和構築活動の例、その生き方と社会的功績、地域あるいは世界規模でのその有益な実績および紛争解決と平和構築に対する多大な貢献を紹介している。これらの博物館にはジョン・ラーベ国際安全区記念館（南京、中国）、孫中山南洋記念館（バレスティア、シンガポール）、国立ガンジー博物館・図書館、ネルー記念博物館・図書館、インディラ・ガンジー記念博物館（ニューデリー、インド）、ガンジー記念博物館（アフマダーバード、インド）、ホーチミン博物館（ハノイ、ベトナム）をなどがある。

5. サマルカンド平和と連帯の国際博物館とその提携先の平和構築活動

この文化的言説の中で、サマルカンド平和と連帯の国際博物館と他のいくつかのアジアにおける博物館を例に、博物館の平和構築活動の一部を考察してみよう。

サマルカンドの平和博物館は1986年に設立された、中央アジア初の平和構築に関する国際的博物館である。同博物館の企画活動の理念は、異文化間の対話、市民外交および多文化的創造性の発展における平和構築に関する展示物の社会的重要性を基礎とするものであった。

サマルカンド平和博物館は、人々と地球市民の交流と相互理解の文化パターンに関する視覚およびコミュニケーションの空間と考えることができる。これまでに推進された企画は、現代の博物館が単に記録資料である展示物を収蔵するのではなく、これら展示物を生きた平和構築の実践の一端を担う物に変容させる場であることを示している。また同博物館は平和の文化についてのアイデアと象徴物を生み出す創造的な実験室にも見える。平和構築のためのアートプロジェクトでは、展示物の新たな誕生の場とそれが世界に加わる道筋が設計・手配されている。実際そこはモノ中心の空間であり、そこで出来事としての事物の歴史と社会劇の特徴がモデル化され、体験される。この視点での事物は社会的モノあるいは「社会化ツール、それをめぐる会話が導入されるコンテンツ」［Simon 2017: 167］という地位を獲得し、その力を借りてカルチャーシフトが成し遂げられる。このようにして人々と博物館にある展示物の相互参加と共同創作の中で新たなリアリティが生まれ、サイン、タグ、ラベル、ヒント、合図その他の叙述的および視覚的表現で満たされる。

モノ志向の実践例がある。「平和の栽培」という企画で、博物館の来館者が招かれて手近な材料から平和を推進する創造物を作成し、それを来館者自身にとって身近なものとし、名前を付けて、形式や美、価値、名前を一切持たない何かを芸術的に作り上げる。この平和構築のデザイナーは、このリアリティの創作者の役割を務める。この企画は平和を育てることに個人を直接関与させるだけでなく、その人物が個人的に実行したことに対する責任を作り出す。また重要なのは、博物館の来場者が独自に平和の創造物を作成すると、次のようなことを理解し始めるという点である。つまり自身の独自の創造力、その思考、手を使い、今ここで文化を繁殖させ変化させて、秩序立ったもの、美しいもの、優しいもの、不変なものの境界を広げているということである。個人による平和の創造物のデザインに関する他の例としては、美術工芸の上級クラスと、それに加えて陶芸、テラコッタの小像、刺繍その他の創造的芸術に関する今後有望な美術工芸の公開ワークショップがある。

同博物館はすべての企画において、文化の創造物は受動的な熟考の対象であるべきではなく、常にその人道的性質を現し、平和構築の展示物として提示されるべきであるということを証明しようとしている［Ionesov, Ionesov 2015］。このようなシナリオに従い、折り紙を折るという伝統が育まれてきた。そうやってサマルカンド平和博物館は折り紙の講座と発表を定期的に実施し、日本の紙の芸術と芸術的デザインの一般的習慣を通じ、美、優しさ、秩序の思想の育成を実行している。日常生活の創造物を平和の文化の展示物に転換することは美学上魅力的で、社会的に教育的であり、さらにアートセラピー的な

平和構築の実践でもある。このような手仕事による事物の多くは後日博物館の展示物となる。つまり創造性という力強いエネルギーを持ち、記憶を蓄積する装置、新たな創造活動を駆り立てる力となるのだ。

サマルカンド平和と連帯の国際博物館による大規模な国際プロジェクトの１つに「平和の署名」があり、これは平和の文化の多様な象徴物を博物館化するだけでなく、平和外交のコミュニケーションの実践に、またウズベキスタンとその近隣地域における各種の教育活動に組み込むことを可能にする。これまで世界中から1,500名を超える参加者がこのサマルカンドの平和の企画に加わっている。このプロジェクトの目的は、世界の市民による個人的な人工物とメッセージを収集し、それらを文化と普遍的な人間の価値に役立てることである。そして平和の署名の力を借りて、生きた架け橋が同時代の偉人たちと共に築かれ、彼らは社会的地位、ジェンダー、年齢、職業にかかわらず誰もが参加できる開かれた今日的な対話の共同参加者となった。このプロジェクトは世界が１つであり、ノーベル賞受賞者であれ、偉大な作家や科学者、研究者であれ、皆その市民であるということを明らかに示した。後で分かったことだが、平和の署名は知識、助言、知恵の極めて貴重な宝庫でもあり、要するに署名というものは人間の創造性の中で最も個人的で唯一無二の、極めて特殊で偽りのない、最良の例なのである。各署名には文化的アイデンティティの象徴、時間の刻印、人柄の痕跡、多様性の典型が見られる。これらを博物館で展示することにより、署名は情報量の多い感情豊かな個人のメッセージの中継装置となり、それらはオープンで分かりやすく、人格を体現しており、世界をより良い方向へ変えることができる何かを包含する。

同博物館の「平和の署名」プロジェクトが他の多くの平和構築に関する実践を促したのは偶然ではない。その一部はサマルカンド平和博物館（ウズベキスタン）とサマラ・カルチュラルスタディーズ学会「人工物―文化的多様性」（ロシア）との協力の結果として生み出された。こうした意義深い共同開発の１つが「平和の文化の著名人：個人が世界を変える」という国際プロジェクトである［Ionesov, Kurulenko 2013］。

このプロジェクトの目的は、傑出した科学者、芸術家、政治家、探検家、宇宙飛行士、実業家、スポーツ選手との対話を通じ、人生の最も重要な問題、つまり文化とは何か、何が21世紀の世界を救うのか、いかにして平和の文化を理解し実践するかについて、普遍的な人間の対話の垣根を広げることである。このプロジェクトの考え方は非常に単純かつ具体的で、それは一人の人物がいて、その人の仕事があり、科学、文化、経済、政治などの発展への個人的貢献があるということである。その功績は争う余地がなく、社会的に認知されている。文化に対するこの個人的貢献の諸例は、他の人々にとって有益でためになる可能性があり、またそうあるべきである。30名を超えるノーベル賞受賞者、15名のオスカーとグラミー賞受賞者、また優れた哲学者、文化学者、作家、映画監督、有名人などが対話者の輪に招かれた。プロジェクトを実行するさまざまな段階で対話の参加者リストに加わったのは、イリヤ・プリゴジン、フレデリック・サンガー、アーサー・クラーク、ヴァツラフ・ハヴェル、ホセ・カレーラス、ジャン＝マリー・レーン、フランク・ウィルチェック、ヨハン・ガルトゥング、アンソニー・スミス、フレデリック・デクラーク、ヴァンダナ・シヴァ、デズモンド・ツツ、トール・ヘイエルダール、デイヴ・ブルーベック、ジョン・マクラフリン、エヴェリン・グレニー、イアン・アンダーソン、スパイダー・ロビンソン、ジョン・コリリアーノ、バリー・マーシャル、ハリー・トリアンディス、アンソニー・ギデンズ、ハコブ・ナザレチャン、ニコライ・クレノフその他多数である。

極めて重要な問題の解決に対する彼らのビジョンは、平和の文化、非暴力と寛容の哲学を人類の多文化的多様性の中でどのように啓発し推進するかについての理解を深めるのに役立つ。例えば優れた舞台演出家で映画監督のピーター・ブルック（1925年生まれ）からプロジェクトのキュレーター陣に送られたメッセージがある。彼は平和の文化とは何かと尋ねられたとき、次のように回答した。

真実という名の木があり、隠れた根っこと数え切れないほどの枝を持っています。芸術はその枝であり、表現はその葉の中にあります。私たちは文化を偽の神に仕立てないよう細心の注意を払わなければなりません。理論やメソッド、政府からの介入によって木は簡単に枯れ葉を生み、自らを額縁に入れて得意げに展示しかねません。真実が何よりも先で、明確な形式というものはないのです。それは何度も何度も新たに発見し直されなければなりません。そうすれば文化は、独自の意義を帯びるようになります。つまりそれは食べ物を与え、肥料をやり、守る培養者の行為なのです

それから著名な映画監督で脚本家のミロス・フォアマン（1932 ～ 2018 年）からの短いが極めて正確なメッセージも言及する価値がある。彼は「文化がなければ世界は退屈な地獄になるでしょう」と述べている。

この「平和の文化の著名人：個人が世界を変える」プロジェクトに対する活発な反応が、アジアの多数の平和推進者と芸術家から寄せられた。例として著名なインドの音楽家兼作曲家・作家のチトラヴィーナ・N・ラヴィキランのメッセージから引用する。

文化は多くのことを包含しており、複数の角度から見ることができます。あるレベルでは、文化とは個人や社会がどのように考え、話し、生活し、行動し、環境に反応するかの核の部分です。個人や社会が文化的かどうかの本当の試練は、すべてが前向きで豊かで楽しく幸せなときには測ることができません。それは状況が後ろ向きなときや危機に瀕しているときにだけやってきます。文化は単なる即席の魅力ではなく、時間を超えた価値、つまり人間の価値、そして宇宙規模の価値に関するものです。政治家や意思決定者、教育者、企業、メディアを含め、誰もが文化は塩や香辛料のようなものではなく、水と空気に近いということを認識しなければなりません。あらゆるレベルで文化は奨励され、提案され、保護されなければなりません。昨今、ほとんどの国が経済危機のときには文化が科学や技術、健康等ほど重要ではないとして、文化芸術向けの予算を削減します。肝要なのは、文化が保育園レベルから教育の一部でなければならないということです。それは１つの自然な生活様式にならなければなりません。そうでなければ子どもたちは彼らが学ぶ対象である機械のように没個性で非人間的に育つだけでしょう。平和の文化とは何でしょうか。あらゆるレベルで（内的にも外的にも、個人でも社会でも、国内的にも国際的にも）、積極的平和が重要であり、それは文化を備えた人々のみがもたらすことができ、国や地域、言語その他の対立要因を超え調和して作用するのです。平和は異なる文化背景を持つ人々が、他のどんな文化もまた自身の文化と少しは似ていると気づいたときに訪れます。異なる文化間の類似が出発点になれば、その差異は我慢できない、あるいは克服できないものとは思えないでしょう。非常に質の高い音楽やその他の芸術は、異なる文化を持つ人々の間にこういったレベルの思考をたやすくもたらすことができます

多くのメッセージがより創造的に実り多い形で平和の文化を拡大し、人道主義と調和のモデルを魅力的で望ましい人々の日々の暮らしにおける価値へと変える必要性を示唆している。博物館が平和を推進（博物館化）する際の本来的な関与のあり方としては、アーカイブを貯め込んだ壁の中に平和を閉じ込めるのではなく、社会への扉、あるいは文化と自然との新たな対話への入り口さえも開く必要がある。地球上の平和は、自然からの適切な供給がなくては不可能である。文化のエコロジーは魂のエコロジーであり、最も高度な精神的、社会的、経済的、自然的価値の有益な結合であり統合物なのである［Shiva 2013］。

同博物館の企画「何が 21 世紀に文化を救うのか」の主催者からの質問に答えて、現代の人道主義哲学

を代表するインド人作家で活動家のヴァンダナ・シヴァは「価値、実践、世界観が地球上の命を持続させるのです。共同創作者、共同制作者として地球という生命系の経済の創造物に敬意を持ちましょう」と書いている。このインド人作家によれば、平和の文化は「地球との和解」というそれに属するにあたっての原則、新しいエコロジカルな思考なしには不可能である。

「サマルカンド―詩のミューズ」という国際的な社会芸術プロジェクト（「文学上のイメージと地球市民の音楽創作におけるサマルカンド」、2010年）は特記するに値する。サマルカンド平和博物館の主導のおかげで活動家たちは多数の詩を収集することに成功し、その中では特にサマルカンドについての言葉が異なる国と大陸の人々を触発し、癒やし、つないでいる。サマラを拠点とする女性詩人で作曲家のガリーナ・マスロワによる2枚の音楽と詩のアルバムは、このような市民からの反応の鮮やかな例となった。アルバムはコンパクトディスク形式でリリースされ、多くの国の作者が書いた詩を基にした28曲の歌を収めている。注目すべきは、すべての詩がどれも古代サマルカンドの歴史的遺産がいかに現代生活のほとんどの創造的実践とつながっており、より良い方向への変化を促し、創造力を通じて平和を支持しているかについて語っているということである。こうしたプロジェクトはどれもその目的は、平和博物館が過去というより現在と未来に生きていることを示すことである。平和は生きている人の顔、その美的イメージ、芸術的色彩、それ自体の詩、社会劇、そして創造力を持っている。

サマルカンド平和博物館はこれらのメッセージを具体化して実際の市民向けの企画やプロジェクトを実現し、「広島・長崎：記憶と希望の声」を紹介する多数の機会や、その他核なき世界を目指す運動の象徴となった佐々木禎子の人生のドラマを視覚化した物語を紹介する公開イベントを企画した。同博物館の活動家たちはウズベキスタン共和国による中央アジアに非核地帯を設ける構想を支援するため、「核兵器全面禁止・廃絶のために―ヒロシマ・ナガサキからのアピール」を支持する何千もの署名を集めた。2008年5月には同博物館はオリンピアから北京までの国際バイク・ピースライドのサマルカンドステージに参加し、参加者向けにアートと平和構築をテーマにした一連のプレゼンテーションを主催した。

重要なのは、サマルカンド平和博物館の事例が多様な創造的実践へと形を変え、国際関係と専門分野の協働を地理的に拡張するだけでなく、提携先が新たな平和構築活動や科学フォーラムを実施するきっかけにもなっていることである。この点について、最近のロシアとウズベキスタンの科学教育プロジェクト「ヴォルガ川からゼラフシャン川までの諸文化の対話に関する遺産と現代性：サマラとサマルカンド」（2016～2017年）に言及する価値がある。このプロジェクトはそれ以前に発表された「A Concise Encyclopedia of Foreign Samarkandiana: Culture Linking the World」［Ionesov, Ionesov 2014］の続編となるものである。このフォーラムの主な使命は、サマラとサマルカンドという2つの都市の平和構築に関する過去および現代の人工物に依拠しながら、諸文化の和解と調和を推し進めることである。プロジェクトの目的は、伝統と革新との対話、さまざまな文化遺産の地と関連する社会慣行との間の新たなコミュニケーションのシナリオを通じて地域社会に役立てるため、平和の文化を発展させることである。

サマラ文化の研究者たちが推進した社会教育プロジェクト「家庭のコレクションの博物館」、「エスノルック」、「平和を教えて」なども有益な文化的発展と見なすことができる。こうした企画のおかげで、カルチュラルスタディーズ分野のさまざまな平和構築にかかわる発表、展覧会、パフォーマンスがサマラの博物館で定期的に開催されている。例えば「家庭のコレクションの博物館」は著者たちが企画した特別展という形式で実施しており、家族の物語を基に、どのように平和を構築し、人と人との間の難しい関係性と和解を図るかを紹介している。「エスノルック」は毎年開かれる民族文化のフェスティバルで、参加者はさまざまな芸術技法（歌、ダンス、物語、パフォーマンスなど）を用い、国という共同体

の人道主義的伝統（美、善、充足のイメージと物語）を共有する。「平和を教えて」は学生たちの文化プロジェクトで、各参加者が実際の紛争の視覚的な描写例を用意するだけでなく、それを抑制するシナリオを作り、暴力の回避と文化間の調和のための技術を提案する。

サマルカンドの「平和の花」という提携プロジェクトとそれに付随する毎年のフラワーフェスティバル（2008 ～ 2016 年）は、平和構築の美学のデザインにかかわる新たな事例となった。このフェスティバルのコンセプトにおける平和とは文化的な植物のようなものであり、根気強く育て、守らなければならない。博物館の提携先である、詩人で教育者のオリフ・グルハニ邸博物館が、特別にこのフェスティバルのために 30 種類の花と観葉植物を 4,000 点以上用意し、来場者全員に無料で配布した。ただし 1 つ必須条件があり、参加者は翌年中にその植物の新しい株を 10 名の知人に配ることを約束しなければならない。このことは平和構築プロセスの特性を思い出させないだろうか。それは人が誰かに引き継がなければ、単独ではその人の元にやってこないのである。与えられるものを受け取り、受け取ることができないものを返せという東洋の知恵が思い出される（スーフィーの教え）。花々のように平和を育て、それに注意を払い、美しく飾り、誰かに贈ることを学ぶ必要があるのだ。ある程度まで、平和は美を通じて現実を引きつける［Ionesov 2015］。平和の美学は創造力の強力な触媒であり、人生の充足度と幸福の指標である。丁寧に耕され、よく手入れされた庭以上に平和で穏やかな文化と自然の調和を体現できるものがあるだろうか。

恐らく、しかし偶然ではなく、中世のサマルカンドは魔除けとして極上の庭園文化を披露することで自身を守ったのであり、各庭園はそれぞれ独自の様式と平和を肯定する詩的な名称を持っていた。世界の装飾の庭（Bag-i Nakshi-Jehan）、エデンの園（Bag-i Beshit）、安らぎの庭（Bug-i Buld）、心奪う庭（Bag-i Dilkusho）、幸福の地の庭（Davlet-Abad）、世界を表す庭（Bag-i-Jehan-Numo）などである［Pugachenkova 1887: 174］。そのようにして景観文化の中で平和構築の思想とイメージを具現化する伝統は、現在サマルカンドの都市空間のみならず世界の他の地域でも活発に展開されている。

その中にアジア各地の平和公園があり、広島平和記念公園、長崎平和公園（日本）、バラム平和公園（ボルネオ、マレーシア）、平和公園（ラブアン、マレーシア）、オウシュグラブ平和公園（イスラエル／パレスチナ）、ヨルダン川平和公園（ヨルダン／イスラエル／パレスチナ）、寛容の公園（エルサレム、イスラエル）、環太平洋海洋公園（ウラジオストク、ロシア／済州島、韓国／プエルトプリンセサ、フィリピン／高雄、台湾／煙台、中国）、クンジェラーブ（中国／パキスタン）、国連平和公園（慶熙大学校、水原、韓国）、ノグンリ平和公園（永同、韓国）、世界平和の鐘公園（ケルタラング、インドネシア）、ガリポリ平和公園（ガリポリ半島、トルコ）、バーミヤン平和公園（バーミヤン、アフガニスタン）などが挙げられる（http:/ /peace.maripo.com/p_parks.htm 参照）。

サマルカンド平和と連帯の国際博物館のプロジェクト活動から分かるとおり、中央アジア地域における平和の文化の推進は、行動に関する国の伝統と民族的ステレオタイプに創造的に訴求することで一層効果的になるのであり、それは芸術－装飾的および社会－儀式的な平和構築の慣行を通じて最もよく現れる。平和の文化は伝統的な東洋の歓待の習慣、その国特有の装飾、集合的な創造力と出会ったときに一層発展する。例えば毎年の伝統的な祝日であるノウルーズ（元日）は東洋では 3 月 21 日に祝われた。この古代からの習慣は、同時代の社会－文化デザインの実例として機能しており、歓待、平和愛好、調和、美の長年の伝統が祝祭的な集合的儀式によって実現され、非常に急を要する社会の今日的ニーズがある状況で、緊張と争いを和らげ、文化を充足させている。

そこでサマルカンド平和博物館はノウルーズの人道主義的事例を利用し、この国民の祝日が持つ平和構築の潜在力を明らかにする新しい伝統を提示している。それは「国際手紙の日“アッサローム、ノウルーズ！”」（“こんにちは・あなたに平安を、ノウ

ルーズおめでとう！”）というプロジェクトで、世界をより良い場所にしたいという関心で結ばれた世界中からの何千もの祝いの言葉、祝詞、提案を毎年集めている。各メッセージは人道主義的な意味に満ち、非常に親密で意義があり経験に富んだものを他者に伝えている。平和を生み出すノウルーズの伝統に訴えることにより、この人間性の時代にとって主要かつ必須である救済の考え方を打ち出そうとするこの文化的・教育的プロジェクトが伝える主なメッセージは次のようなものだ。考えなければ―理解しない。理解しなければ―感じない。感じなければ―私たちは消える（破滅する）。このプロジェクトのおかげで、ノウルーズは単なる祭日ではなく、1つの完全な哲学、あるいは言い換えれば、慈しみ深い美と生活の平和化の文化であることが明白になった。ノウルーズの祝祭文化はもうひとつ、平和構築の意味が詰まったスーフィーの知恵を思い出させる。それは「自分にとって終わりつつあるものはそのままにせよ、終わらせて、やるべきことを自分でせよ」というものである。

サマルカンド平和と連帯の国際博物館のもう1つの有益な事例は、国際語であるエスペラントの推進に関係している。エスペラントは人々の和解と調和の国境を越えた文化の一種と見なすことが提案されている。そのためにエスペラント語は実際この博物館の特徴となった。博物館の活動のはじめに言葉ありきだったとしたら、その言葉はエスペラント語だった。そしてそれは偶然ではない。

エスペラントは恐らく、万人共通の人間のコミュニケーションに関する最初の世界的プロジェクトと見なすことができ、地球上のすべての人々と国々のために一人でポーランド人の人道主義者L・L・ザメンホフ博士（1859-1917）によって提案され、創案された。ある意味エスペラント語は、平和を育て、距離を近づけ、人々を1つにまとめ、コミュニケーションを拡大するという、博物館の平和構築の実践に関する主な価値の重要事項を完全に体現している。つまりエスペラントは（民族語とは異なり）最初にあらかじめ決められた、異なる国籍の人々を束ねる唯一の言語なのである。

エスペラントの核心部分にあるのは、平易さと秩序の重視である。エスペラント語の各フレーズは異なる言語と人々を1つにまとめるように思われ、伝統と文化の統合の中にのみ平和はその活力を見出すということを教えている。そしてこの点が、現代の平和構築プロセスにおいて、社会的に意義があり文化の上で啓発的なエスペラントという国際語のもう1つの価値であると考えられる。

エスペラントのこうした創造的可能性はすべて40年以上の間、サマルカンド国際友好クラブ「エスペラント」（その主なプロジェクトの1つがサマルカンド平和博物館の設立であった）のさまざまなプロジェクトやプログラムの中で効果的に実現されており、それには国際的な平和に関する展覧会、ワークショップ、フェスティバル、派遣、児童美術展、マスタークラス、講座、本の寄贈、会議、コンサート、リサイタル、スライドフィルムなどが含まれる。

それに続いて2018年7月、「エスペラント―さまざまな人と文化を近づける言語」という複合的プロジェクトがサマルカンドで成功裏に行われた。このプロジェクトの中では語学講座と同時に、国連文化の和解のための国際の10年という喫緊の世界的課題およびウズベキスタンにおける活発な起業家精神、革新的なアイデアと技術を支援するという国内的課題という文脈で、テーマ別セミナーや講義、コミュニケーションの実践が行われた。エスペラントの平和構築の力は現在、日本、中国、韓国、ベトナム、ネパール、タジキスタンなど多数の他のアジア諸国で活発に利用されていることを指摘しておく必要がある。

6. アジア地域における平和博物館の実践

サマルカンド平和と連帯の国際博物館の建設的な事例と並んで、他のアジアの博物館による実践も興味深く有益である。そこでは行動とコミュニケーションによる関与の創造力が博物館化の対象として個々の地域の平和に関する伝統的価値と組み合わさ

れ、人々の日常生活を変化させるための魅力的で利用しやすく、需要のある有益なツールとなっている。現代のアジアの空間には、これをどのように効果的に現実に実行できるかについて、また抽象概念としての平和が成功裏に実際の文化政策に変換されているケースについて多数の事例がある。

多彩な活動で国際的に知られる立命館大学国際平和ミュージアムは、普遍的な人間の価値と国としての記憶のサンプルを博物館化する現代の技術とコミュニケーション文化によって、特定の地域で世界をより良い方向に変えることが可能だということを示している。同ミュージアムが実践しているプロジェクトセミナーや展覧会には「“へいわ”ってなに？？」（2009年8月1～2日）や「平和ってなに色？」（2005年10月27日～11月3日）といった雄弁なタイトルが付けられており、平和構築活動がますます豊富な文化的コンテンツを持ち、創造的体験とコミュニケーション戦略になっていることを示している。

テヘラン平和博物館（イラン）の展開はこのような文化的視点で実施されている。その平和構築プロジェクトの名称のごく一部を挙げると「優しさという無作為の行為」、「CWオーラルヒストリー」、「平和と笑顔」、「不死鳥」などがある。「優しさという行為」の主催者は次のように述べている。

> このプロジェクトではこの社会で利用できるさまざまな手段を通じて平和と優しさの文化を推進しようとしています。計画していることの例として、病気の人やお年寄りを訪ねる、ホームレスの人たちに食べ物や衣服を渡す、笑う、持っている技能を必要としている人々に提供する、公共の場所を掃除する、子どもたちにアイスクリームや小さなおもちゃを贈るなどがあります。
> （http://www.tehranpeacemuseum.org/index.php/en/ 参照）

「CWオーラルヒストリー」というプロジェクトの中では、私たちのイラン人の仲間が化学兵器を浴びた犠牲者とのインタビューを保存し、率直な逸話、記憶、証言のアーカイブを作成している。それぞれの話には音声と映像および書き起こしが添えられ、オリジナルのペルシャ語と英語の翻訳で読むことができる。

「平和と笑顔」の参加者は、紛争と戦争で引き裂かれた地域や戦跡への平和のツアーや道路地図を作り、また同時に精神的な中心地、博学な教師、指導者、環境的に重要な場所を訪れるよう促される。それはすべて過去から学び、現在への理解を深めるためである。策定された各観光ルートには情報と学習資料が添えられている。

「不死鳥」というプロジェクトはボランティア（戦争の惨事の生存者を含む）の研修を行い平和の大使として地域社会に派遣している。そこでは平和構築のための特別なガイドを養成し、そのガイドたちは他の人に教えたり、平和博物館を自身で案内するガイドツアーの実施を提案したりしている。プロジェクトの参加者が平和構築の文化のデザインを自ら作り出す点が重要であり、それは衣類、印刷物、記号、展示ホールの装飾に、また招待状の形式にまで反映されている。

平和構築活動の文化の焦点は、平和と人権のための子ども博物館（カラチ、パキスタン）の芸術－社会および教育プロジェクトに明確に見て取れる。ここでの平和構築の実践は、単純な手順と小さな行動を通じ、価値あるアイデアと成果、つまり子どもと若者が知識を備えた活動的で社会参加する市民として成長し、地域社会に意義ある建設的な貢献を行うことができ、かつそれを望む、社会的に公正で安定した社会の構築を推進するというものである。同博物館の展覧会は、専門家とボランティアの力を借りて、平和、寛容、非暴力の文化に関する物語、経験、装飾物を共有することを人々に促しているようだ。このような博物館は平和構築の伝統を提示してみせるだけでなく、さまざまな社会的に意義のあるプロジェクトを通じ、社会の中でそれを積極的に推進する。それは必要な知識を提供し、文化的価値を紹介し、世界を理解するのを助けることにより、生活の中で、特に子どもたちのために実際の効果を生

み出すことを可能にする。ただし博物館のスタッフにとって重要なのは、確実に一人ひとりの子どもが人権、平和、社会正義、寛容、そして多様性に関する社会的応答性を養い、その結果として所属する地域社会にプラスの貢献を行うことができるようにすることである。博物館の専門家に従いこのような形で形成された平和の文化は、パキスタンにおいて社会的に公正で寛容な社会の基盤を作り出すための最大の初期投資として機能している（http://cmphr.org/our-vision/ 参照）。

この点に関して、カンボジア平和博物館・平和学センター（シエムリアップ、カンボジア）のプロジェクト活動は非常に有益だと思われる。これらの組織が推進するプログラムは、劇的な状況に直接影響される人々を平和構築プロセスに関与させ、そのためつまり、彼らは所属する地域社会に立ちはだかる問題にとって最善の解決策を決定するために必要な知識、理解、経験を有していることが多い。紛争と暴力が引き起こす緊張を要する状況の回避に関する講座の参加者は、困難の克服と生存という自らの人生の経験に照らして平和構築作業の手法を学ぶ。この講座は新しい平和構築のリーダーを養成していわゆる「乗数効果」を生み出し、研修を受けた人だけでなく、プロジェクトの参加者が提唱するアイデア、プログラム、政治シナリオに影響を受ける可能性がある人々をも感化する。

この平和構築の実践の際立った特徴は、暴力の直接的犠牲者からの情報と連絡を求める点である。戦争の生き証人の体験と声の録音が特別なコレクションの中に集められ、科学と教育分野の平和構築活動だけでなく、暴力の犠牲者の心的外傷後症候群を予防し排除する実用的作業でも使われている。この「声を聴く」というプロジェクトは、企画者の見解によると、平和のいわゆる信頼できる可動の構造を形成することに寄与し、そのプロセスのために、文化的文脈と社会的変化に対処し、究極的には世界を変え、それを担うことができるリーダーを養成するものである。またプロジェクトの主催者は「地元の関係者と平和活動の実践者の指導力に投資することは、学んだ教訓、新しい姿勢とネットワークを提唱するため、そして最終的に暴力的な紛争が再発する可能性を低減するために必須です。主だった人々に長期的な指導力の養成に参加してもらうことは、技能を自らの状況に適用すれば平和の持続を拡大し、また同時に取り組みを推し進めるアジアの強い平和のリーダーたちのネットワークも生み出します」と考えている（http://www.centrepeaceconflictstudies.org/peace-museum/ 参照）。

日本の「平和のための博物館市民ネットワーク」の多様な平和構築の実績は言及に値する。恐らくこれは唯一の全国的な博物館ネットワークで、INMPにおいて主要な役割を果たしている。私たちの日本人の仲間が定期的に年次会議を開催し、技能と専門知識を共有し、回報『ミューズ』を発行するなどしている。また重要な取り組みとして、安斎育郎教授の新プロジェクト「福島プロジェクトチーム」を過去（発電所の事故）と現在の生きたつながりの例として認識すべきである。これは非常に有意義であり、世界で最も多数の平和博物館を有しているのが日本であることは決して偶然ではない。

新たな平和構築の実践がうまく育まれているもう1つの今後有望な場として、横浜の神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）がある。この機関の名前そのものが「アース（地球）」と（日本語の）「明日」という2つの単語の組み合わせであり、将来この地球に何が起こるのかについてじっくり考える動機を提供しているかのようだ。「地球市民」とは平和や環境、貧困といったグローバルな問題の解決について日々考える人のことである。しかし現代の世界はすべてが互いにつながっているため、グローバルに考えローカルに行動することで、自分の地域（都道府県）の生活を変化させるだけでなく、地球規模のプロセスにも影響を及ぼす。「あーすぷらざ」はそのプロジェクトにおいて、時間の接続とこの時代の目下の今日的課題という文脈で、社会と自然、ローカルとグローバル、その国特有のものと万国普遍のものとの間での建設的な相互作用の体験を育てている（http://www.earthplaza.jp/english/about.html 参照）。重要な考え方として、過去とい

うものは現在と接続され、そして文化によって平和を守らなければ人類は将来に何を期待できるかという点の理解と接続された場合のみ、私たちにとって重要になるということである。

さらにもうひとつ魅力的なものとして、日本、韓国、米国の芸術家とデザイナーのグループが立ち上げた国際的な創造的取り組み「ピースマスクプロジェクト」（http://www.peacemask.org/ 参照）がある。このプロジェクトは諸文化を引き合わせ、調和させることを目的として、実に多様で情報に富み、唯一無二である表情豊かな人間の顔に注目することで、さまざまな職種のボランティア数百人の活動を集約している。これは平和を象徴するだけでなく、平和について語る仮面の造形を通じてなし得るように思われる。文化論的な言説において「仮面を取る」という表現は相反する二重の意味を獲得しており、一方では本当の姿を見せること（仮面をはがす、顔をさらす）を、他方では顔の型を取ること（仮面を付ける、顔を隠す）を意味する。人間の顔にある個々の襞と皺にはその人が生きた軌跡、その歴史、出来事、経験、希望、志という道の地図が刻まれている。仮面の制作とその造形表現は共同創作を通じて人々を１つにするだけでなく、多様性に向けて創造的可能性を開き、普遍的な人間の価値の意義を高めるものである。

このように、この 10 年の平和と非暴力の文化の博物館化における絶対的な傾向は、アジアの博物館による、平和構築の展示の芸術－視覚デザインに関するコミュニケーション戦略への要請だと認識されるべきである。戦争の対極にあるものとしての平和という従来の認識が持続し、確立された博物館の実践に基づくその歴史的発展が優位を占めつつも、現在では平和という概念の新たな幅広い文化論的解釈へ、そして文化的経験または平和文化としての平和構築という条件付きの（それに起因する）理解への明らかな移行が見られる。文化論的アプローチは平和構築活動の垣根を大いに取り払い、受け入れられる程度に十分かつ多様な形で人生を変え調和させる創造的プロセスとしてそれを定義する。平和とは何を置いても、人類の自己実現のために最大限の機会と条件を育て、そして個人のために自然と文化を親しみあるものにすることである。

要するに、社会慣行としての平和構築はそれ自体の認識可能で魅力的な属性を有している。線、輪郭、色、形、匂い、様式、作風、体験、つまりはその社会－芸術的言語、つまりはそれ自体の文化である。博物館設計の領域でこうした利点（機会）と資源をすべて採用してはどうだろうか。平和の文化は消極的な熟考のプロセスではなく、積極的な人生肯定の実践である。その使命は、行動する言葉、形のある匂い、音を立てる色などといった新たな価値を生み出すことである。この点について、人間生活の非常に多様な社会的・美的価値を捉えることができるような新しい平和博物館を作る必要性がある。例えばそのような新たな平和構築の場は、慈善の博物館、美徳あるいは善意の博物館、寛容と歓待の博物館、普遍的応答性の博物館になるかもしれない。ただし、それらが不可侵の思い出の品物としてではなく、現代の差し迫った問題を解決するための行動の創造力、相互参加、共同作業の開かれた実験場として機能することが条件である。

この点に関して、前（元）国連高官で著名な根気強い平和論者、ロバート・ミュラー博士（1923-2010）がサマルカンド平和と連帯の博物館に宛てたメッセージ（1995 年 3 月 13 日）を思い出す。その中で博士は博物館が非暴力の生きた事例を明確に表現すること、そしてあらゆる可能な方法で文化を通じて平和構築の最善の例を広めることがいかに重要かに注目するよう促している。このメッセージの中でミュラー博士は、国連事務総長だったウ・タントが海外出張から戻って「どの国の首都を訪れても名もなき兵士の記念碑に連れて行かれるが、名もなき平和の担い手の記念碑に連れて行かれることは決してない」と書いている。また、後にコスタリカの国連平和大学の名誉総長となるロバート・ミュラーはその言葉を思い出して以下のように書いている。

> 彼のこの言葉を思い出しましたが、今では国連平和大学に初めての名もなき平和の担い手の記念碑があります。地球上で 2 番目にこのよう

な記念碑が立てられる場所がサマルカンドだったら素晴らしいでしょう。可能であれば、私のこの夢を叶えてください……引き続き連絡をまめに取り合いましょう。大きな夢がサマルカンドで生まれています。それは世界中に広がるでしょう。この美しい惑星全体とそこにいるすべての人々に平和が訪れますように。

7. 結語

平和構築の実現は常に試練であり挑戦である。問題を単純化し、過度に空想的になることに価値はない。平和の文化を戦争の文化から切り離す準備はまだ十分にできていない。戦争は得てして平和推進者のふりをしている。そして私たちは時として見せかけの平和の下で、意図せず戦争と暴力の文化を推し進めていることがある。私たちの思考、行動、欲求、価値の中にはあまりに戦争があり過ぎる。

「側道、それが平和ではないでしょうか？」――かつて傑出したフランス人哲学者、ジャック・デリダはサマルカンド平和と連帯の国際博物館へのメッセージ（2000年7月30日）の中でそう述べた。しかしそれでも誰が（通路に逆らった）その小道が実現不可能だと言っただろう。結局のところ、平和は1つの絶対的な強みであり、それだけが人（人類）に救済のチャンスを与えるのだ。

【謝辞】

本稿を丁寧に校正し、有用なご意見をいただいたデイビッド・ポーター氏（英国）に、またアジアの平和博物館に関する有益な資料の提供と、重要な所見と価値ある説明をいただいたアナトーリ・イオネソフ氏（ウズベキスタン）に感謝の意を表する。

※なお、紙面の関係で参考文献は割愛した。（P.097参照）

Ideas on Peacebuilding in Asia:

How to Create Peace in the Region
(Reflecting the Experience of the Samarkand International Museum of Peace and Solidarity and Its Partners)

Vladimir I. Ionesov
Director, International School for Advanced Research in Cultural Studies
Professor, Chair of Department of Theory and History of Culture
Samara State Institute of Culture

1. Museum as a Cultural Reality: the Asian Context

First of all, the peace museum should be viewed as a cultural reality. The Asian world is large and diverse, but with all the differences within its cultures and peoples, the East has something in common, recognizable, unchangeable that gives it a unique color, a distinctive way of life, a cultural style and a special outlook. What does the identity, originality and recognizability of the culture of the East consist of ? I believe that, first of all, in its inherent accentuated ornamentation (decorativeness), the presence of which we notice everywhere in the special construction of thought, word and deed. In the everyday culture of the East, everything is framed by the aesthetics of dress, ornament, and custom.

Another feature of the East is ceremonialism. Here one cannot come to the truth in a straight line, but only through ritual-symbolic shifts and transitions, ethical mediation, distance.

The reality surrounding a person is not perceived directly, but through images of the world – by means of metaphors, allegories and symbolism. For this reason, in Oriental culture, the path of peace and creation lies through *decorativeness and ceremonialism.* Moreover, if the social drama is pacified by ceremoniality, the new order is filled and approved by ornamentation, then the desired world is embodied and the necessary harmony is being formed. The harmony of peace in Asian culture is stretched in different directions: decorativeness makes life closer and more understandable, ceremony keeps a harsh reality at a necessary distance from the person, not allowing him/her to get burned from it. Due to ornamentation and ceremony, a person of Oriental culture does not know loneliness as such, he/she is always surrounded by the beauty of custom. If for Western culture, peace is the result of an achievable strategy, long overcoming and transformation, one must strive to go to for it. For the Oriental person, peace is what pleases and inspires here and now. ─*There is no way to peace, peace is the way* (M. Gandhi).

All this must be taken into account when promoting peacemaking practices in the East. An appeal to the national-cultural specifics enables the museum to transform ethnic stereotypes of behavior into creative resources and socially significant projects of peacemaking activity. In this case, peace museum becomes an effective social institution for rapprochement and reconciliation of cultures in the status of a successful participant

of the most relevant humanistic practices.

2. Peace Museums an Object of Modern Humanitarian Knowledge

Historiography of the issue of museumification of peace is not as extensive as it deserves. Museum practices of peacemaking are considered by researchers primarily in the context of social violence, conflict and military history [Anzai, Hayashida, Kimura 2018; Anzai, Apsel, Sikander 2008; van den Dungen 2016; van den Dungen, Yamane 2015; Yamane 2009], but in some works the issues of theory and practice of museum design are raised [Anderson 2012; Crooke 2006; Golding, Modest 2013; Hein 2012; Ionesov, Ionesov 2017; Lindauer 2006; McKenns-Cress, Kamien 2013; McLean 1993; McLean K., Pollock 2007; Shirky 2008; Weil, 2002; Yamane, 2006]. The task is posed to re-qualify the concepts of war and peace in the context of cultural knowledge [Apsel 2016; Barrett, Apsel, 2012; Bedford 2014; Ionesov 2015; Jenkins 2006; Pachter, Landry 2001; Schirch 2014; Simon 2017]. Modern researchers, in general, emphasize the need to progress to new communicative strategies in designing the peacemaking process, to the actual relevant technologies of visual modeling and creative experience of representation of peace as a cultural value. The authors point out the significance of expanding the art-object and eventful screening of the museum space, in which things and people will act as participants of a big conversation about the pressing needs of the present [Art Council England 2013; Bensaid 2011; Bishop 2013; Carey 1989; Conflict Transformation 2014; Crossick, Kaszynska 2016; Harman 2005; Genoway 2006; Jarman 2017; Ionesov, Ionesov 2015; Ionesov, Kurulenko 2013; Norris, Tisdale 2013; Roberts, 1997; Romano 2015; Schirch 2004; Simon 2010; Smith 2006; Sontag 2003].

Publications and projects of the main strategist and coordinator of the museum activities in the field of peacemaking – the International Network of Museums for Peace/ INMP (see hhttps://sites.google.com/view/inmp-museums-for-peace/home) appear to be very helpful in the study of the actual practices of museumification of peace. The activity of INMP today unites many museums and organizations from around the world cultivating ideas of peace and non-violence. The Network accumulates both theoretical and practice-oriented research concerning the problems of peace, regularly holds international forums and thematic discussions on the development of museum peacemaking movements. The main thing is that the International Network of Museums for Peace has managed to form its culture – its recognizable image, its philosophy of the world order, its traditions, social and artistic practices, educational projects, publications, symbolic attributes and even its language of professional creativity. The creation of its culture is in itself a great asset, because the organization has acquired the necessary effective tools for the implementation of its peacemaking mission and the promotion of socially significant initiatives [Ionesov, Ionesov 2017].

3. Key Topics Regarding the Study of the Asian Peace Museums

Peace museums in Asia, their collections, projects and achievements are covered in the works of I. Anzai, M. Hayashida, A. Kimura [2018], A. Ionesov, V. Ionesov [2014], Sh. Khateri [2008], A. Kimijima, J. Vidya [2013], S.S. Mehdi, [2005],

Ch. Tsuboi [1999], K. Yamane [1996; 2006; 2009], etc. At the same time, the scope of their research includes issues of peace preservation in regional communities, general problems of disarmament, commemorative activity, experience of social design and volunteer movements. Despite the variety of museum projects, peace in the works of many authors is positioned primarily as a memory about the victims of wars and violence, perpetuation of knowledge about the past through the public presentation of documentary evidence and the reconstruction of war related and historical events. However, in recent years, we can also notice a different trend. A number of publications focus on the social aspects of the museum's educational activities and the techniques of its relationship with society [Anzai 2012; Ionesov, Ionesov, 2014; Kimijima, Vidya 2013; Yamane, 2006]. The peace museum acts in this perspective as an educational platform, enlightening and supporting people in need of knowledge. Researchers of Asian peacemaking practices offer various museum scenarios of uniting people around socially significant values, as well as outline the prospects for the solution of urgent tasks of prevention of social injustice, poverty and violence in the region.

Consequently, in everyday culture, there is a difference in the approaches and perceptions of people of the social mission of peace museums in the East and the West. In Asian tradition, peace is understood, rather as the fixed by tradition, stereotype and social-aesthetic image of a consensual and recognized world order, whereas in the West it is a trans-formative strategy, techniques of taming conflicts and violence and cultivating new values. Here is the data provided by K. Yamane in her article “Peace Education through Peace Museums”. “Only 16% of peace museum answered that their purpose of creating a peace museum is to “spread ideas of non-violence”, only 9 % of peace museums answered that the purpose is “training conflict resolution skills”. These ideas of non-violence and conflict resolution seem to be more emphasized at peace museums in Western countries”. In short, it seems that history education is more emphasized in peace education in Japan, whereas conflict resolution skills are emphasized in Western peace museums” [Yamane 2009b: 147].

4. Asian Peace Museums and the Types of Their Activities

Let’s consider some Asian peace museums in terms of their activities. Here, in the most general sense, there are several types of peace museums that stand out.

1. Universal museums;
2. Museums of weapons;
3. Museums of wars and victims of violence;
4. Museums of peacemakers.

Universal museums in their activities develop general principles, practices and artifacts of peacemaking, in other words, represent the culture of peace in all its social diversity. In the Asian region this type of museum includes the Samarkand Museum of Peace and Solidarity (Samarkand, Uzbekistan); Tehran Peace Museum (Tehran, Iran); Children's Museum for Peace and Human Rights (Karachi, Pakistan); Kyoto Museum for World Peace (Kyoto, Ritsumeikan University, Japan); Kanagawa Plaza for Global Citizenship/ "Earth Plaza" (Yokohama, Japan) etc.

Weapon museums are dedicated to the history and culture of combat weapons, positioned as a) the guardian of peace and a symbol of victory,

or as b) the instrument of death and a memorial reminder of what should never be repeated. To the first category belong the following museums: The Military Museum of the Chinese People's Revolution, China's Militia Weaponry Museum (Beijing, China); Vietnam Military History Museum (Hanoi, Vietnam); The Indian Air Force Museum (Palam, New Delhi, India); Lao People's Army History Museum (Vientiane, Laos) etc. To the second category can be attributed, for example, the Cambodia Landmine Museum (Siem Reap, Cambodia) etc.

Museums of wars and victims of violence are designed, by means of visual adaptation, to immortalize the memories of dramatic historic events about people who died during the war, as well as to highlight crimes against humanity. Museums of this line of activity can be considered the Armenian Genocide Museum-Institute/ Tsitsernakaberd Armenian Genocide Memorial Complex (Yerevan, Armenia); Tuol Sleng Genocide Museum (Phnom Penh, Cambodia); Hiroshima Peace Memorial Museum (Hiroshima, Japan); Nagasaki Atomic Bomb Museum, Nagasaki National Peace Memorial Hall for the Atomic Bomb Victims (Nagasaki, Japan), Twenty-Six Martyrs Museum and Monument (Nagasaki, Japan); Liberation War Museum (Dhaka, Bangladesh); The Thai–Burma Railway/ Death Railway (Ban Pong, Thailand - Thanbyuzayat, Burma); Memorial Hall of the Victims in Nanjing Massacre (Nanjing, China), Museum of the War of Chinese People's Resistance Against Japanese Aggression (Beijing, China); War Memorial of Korea (Seoul, Korea); Independence Hall of Korea (Cheonan, Korea); No Gun Ri Peace Park (Nogeun-ri, Korea); War Remnants Museum (Ho Chi Minh, Vietnam); No More Hiroshima: No More Nagasaki: Peace Museum (Nagpur, India), The Memorial Museum of Victims of Political Persecution (Ulaanbaatar, Mongolia), Halabja Monument and Museum (Halabja, Iraq) etc.

Museums of peacemakers or personified museums display in their exhibit's examples of peacemaking practices of outstanding figures of the humanistic culture, their way of life and social achievements, their instructive experience and significant contribution to conflict resolution and peace-building on a regional or global scale. Such museums include the John Rabe International Safety Zone Memorial Hall (Nanjing, China); Sun Yat Sen Nanyang Memorial Hall (Balestier, Singapore); National Gandhi Museum and Library, Nehru Memorial Museum and Library, Indira Gandhi Memorial Museum (New Delhi, India); Gandhi Smarak Sangrahalaya (Ahmedabad, India); Ho Chi Minh Museum (Hanoi, Vietnam) etc.

5. Peacemaking Practices of the Samarkand International Museum of Peace and Solidarity and Its Partners

Let's try to consider in this cultural discourse some museum practices of peacemaking by the example of the Samarkand Museum of Peace and Solidarity and a few other Asian museums.

The Museum of Peace in Samarkand was established in 1986 and became the first international museum of peacemaking in Central Asia. The philosophy of the project activities of the museum was based on the social significance of the artifacts of peacemaking in the development of cross-cultural dialogue, citizen diplomacy and multicultural creativity.

The Samarkand Peace Museum can be considered as a visual and communicative space of cultural patterns of interaction and mutual

understanding of peoples and citizens of the planet. The projects promoted by it show that the modern museum is not just a collection of documentary artifacts, but also the transformation of these artifacts into participants of live peace-building practice. The museum also appears as a creative laboratory for generating ideas and attributes of the culture of peace. In its peacemaking art projects, the place of a new birth of an artifact and the way of its entry into the world is designed and arranged. In fact, it is an object-oriented space in which the history of a thing as an event and a character of social drama is modeled and experienced. The thing in this perspective acquires the status of a social object or "socialization tool, the content around which conversations are tied up are introduced" [Simon 2017: 167] and with the help by which the cultural shift is carried out. Thus, in the co-participation and co-creation of people and artifacts of the museum, a new reality is generated, filled with signs, tags, labels, hints, cues and other narrative and visual articulations.

Here is one example of object-oriented practice. In the project "Domestication of Peace" the museum visitors are invited to create peace promoting artifacts from handy materials, bring it closer to themselves, give it a name, artistically constructing something that was devoid of form, beauty, value and name. The author of the peace-building design acts as the creator of this reality. This project not only directly includes a person in the cultivation of peace, but also forms the responsibility for what he/she has done personally. It is also important that, independently creating artifacts of peace, museum visitors begin to understand: with their specific creativity, their thoughts and hands, here and now they multiply and transform culture, expanding the boundaries of the ordered, beautiful, kind and eternal... Another example of individual design of the artifacts of peace are master classes in arts and crafts, as well as promising art-craft open workshops for ceramics, koroplastics, embroidery and other forms of creative art.

The museum tries to prove in all its projects: artifacts of culture should not be objects of passive contemplation, they should always reveal themselves in their humanistic nature, and be presented as artifacts of peacemaking [Ionesov, Ionesov 2015]. According to such scenario, the tradition of making origami has been developing. By the way, the Samarkand Museum of Peace has regularly conducted origami lessons and presentations, in which the cultivation of ideas of beauty, kindness and order is carried out through the popular practice of Japanese paper art and artistic design. Conversion of the artifacts of everyday life into the artifacts of the culture of peace is aesthetically attractive, socially instructive and even art-therapeutic peace-building practice. Many of these hand-crafted items later become museum exhibits – they possess a powerful energy of creativity, they are an accumulator of memory and an urge to a new creative action.

One of the large-scale international projects of the Samarkand Museum of Peace and Solidarity has been the Peace Autograph, which enabled not only to museify the diverse attributes of a culture of peace, but also to include them in communicative practices of citizen diplomacy and in various types of educational activities in Uzbekistan and neighboring regions. More than 1,500 participants from all over the globe have joined the Samarkand peace initiative. The aim of the project is to collect personalized artifacts and messages of the world's citizens and turn them into the service of culture and the universal human values. So, with the help of the Peace Autograph, live bridges were built with our outstanding contemporaries, who became co-participants of an open and relevant

dialogue, accessible to everyone regardless of their social status, gender, age, profession… The project demonstrated that the world is one and all of us are its citizens, whether it be a Nobel Laureate, a great writer, a scientist or a researcher. As it turned out, the Peace Autograph is also an invaluable source of knowledge, advice and wisdom – after all, any autograph is the most individual, unique, extremely specific, sincere and best example of human creativity. In each autograph there is a symbol of cultural identity, a seal of time, a sign of personality, a paradigm of diversity. The museum representation of these artifacts turns the autograph into an informative and emotionally rich transponder of personal messages, that openly, understandably, and personifingly contains something that can change the world for the better.

It is not by chance that the museum project "Peace Autograph" has become a catalyst for many other peace-building practices. Some of them were formed as a result of cooperation of the Samarkand Peace Museum (Uzbekistan) and the Samara Society for Cultural Studies "Artifact - Cultural Diversity" (Russia). One of such significant joint developments is the international project "The Personality of the Culture of Peace: Individuals Changing the World" [Ionesov, Kurulenko 2013].

The aim of the project is through dialogue with outstanding scientists, artists, politicians, explorers, astronauts, businessmen and sportsmen, to expand the boundaries of the universal human conversation about the most vital issues of life: what is culture? What will save the world in the 21th century? How to understand and implement the culture of peace? The idea of the project is very simple and concrete – there is a person, his/her work, his/her individual contribution to the development of science, culture, economy, politics… His/her achievements are indisputable and socially recognized. Examples of this personal contribution in culture, of course, can and should be useful and instructive for other people. Over 30 Nobel Laureates and 15 Oscar and Grammy Award winners, as well as outstanding philosophers, culturologists, writers, filmmakers, public figures, etc were invited to the circle of interlocutors. At different stages of the project implementation the participants list of the dialogue included Ilya Prigogine, Frederic Sanger, Arthur Clark, Václav Havel, Jose Carreras, Jean-Marie Lehn, Frank Wilczek, Johan Galtung, Anthony Smith, Frederik de Klerk, Vandana Shiva, Desmond Tutu, Thor Heyerdahl, Dave Brubeck, John McLaughlin, Evelyn Glennie, Ian Anderson, Spider Robinson, John Corigliano, Barry Marshall, Harry Triandis, Anthony Giddens, Hakob Nazaretyan, Nikolai Khrenov and many others.

Their visions of solving the most crucial problems help to better understand how to cultivate and promote the culture of peace, the philosophy of non-violence and tolerance in the multicultural diversity of humanity. Here is one such message sent to the project curators by the outstanding theater and film director Peter Brook (b. 1925), who, when asked, what is the culture of peace, gave the following response: "There is a tree called Truth with hidden roots and countless branches. The arts are the branches, their expression is in the leaves. We must take great care not to make culture into a false god. Through theories, methods and government interventions it can easily make dead leaves, to put in frames and exhibit with pride. Truth comes first and it has no apparent forms. It must be discovered anew, again and again. Culture then takes on its original meaning – the act of the cultivator, to feed, nourish and protect".

It's also worth to mention a brief but extremely precise message from the famous filmmaker

and screenwriter Milos Forman (1932-2018). He admitted: "Without culture the world would become a boring hell".

Live responses to the project "The Personality of the Culture of Peace" came from many peacemakers and artists of Asia. Here, for example, is an excerpt from the message of the well-known Indian musician, composer and writer Chitravina N. Ravikiran: "Culture includes many things and can be viewed from multiple angles. At one level, culture is about how the core manner in which an individual or society thinks, speaks, lives, acts and reacts to circumstances. The true test of whether an individual or society is cultured cannot be measured when everything is positive, prosperous, cheerful and happy. It will come through only when things are negative or when there is a crisis. Culture is not just about instant appeal but it is more about timeless values – human values as well as cosmic values. Everyone – including politicians, decision makers, educators, corporations and media must recognize that culture is *not like* salt and spice but it is *more like* oxygen and water. At every level, culture must be promoted, projected and protected. Today, most countries cut down on funding for culture and arts if there is an economic crisis, thinking that it is not as important as science, technology or health etc. It is imperative that culture must be a part of education from the pre-nursery school level. It must become a natural way of life. If not, children will only grow up like the machines they study about – impersonal or inhuman. *What is the Culture of Peace?* At every level (inner or outer, individual or social, national or international), *positive peace* is important and it can only be brought about by cultured people, working in harmony across nations, regions, languages and other divisive factors. Peace comes when people from different cultures realize that every other culture is also similar to their own culture – at least in some ways. When similarities between cultures can be the starting point, the differences will not seem intolerable or insurmountable. The highest quality of music or other arts can bring about this level of thinking effortlessly between peoples of different cultures…".

Many messages point to the need to more creatively and productively expand the culture of peace, turning models of humanism and harmony into attractive and desirable values of people's daily lives. The inherent involvement of the museum's promotion for peace (museumification) should not imprison peace in the walls of archival funds, but open the doors to society or even the gateways for a new dialogue with culture and nature. Peace on Earth is impossible without its appropriate provision by Nature. The ecology of culture is the ecology of the soul – a beneficial union and synthesis of the highest spiritual, social, economic and natural values [Shiva 2013].

Responding to the question of the organizers of the museum project "What will save culture in the 21th century?", an outstanding representative of contemporary humanist philosophy, Indian author and activist Vandana Shiva writes: "The values, practices and worldviews that sustain life on Earth. Respect for the Earth, creation of living economies as co-creators and co-producers". According to the Indian author, a culture of peace is impossible without "making peace with the Earth", the principle of belonging to it, new ecological thinking.

The international socio-artistic project "Samarkand – the Muse of Poets" ("Samarkand in Literary Images and the Music Creativity of the Citizens of the Planet", 2010) deserves a special mention. Thanks to the initiative of the Samarkand Peace Museum, the activists succeeded in collecting a large number of poetic texts in which

the word about Samarkand particularly inspired, pacified and connected people from different countries and continents. The two musical-poetic albums by Samara-based poetess and composer Galina Maslova were vivid examples of such civic responsiveness. The albums, released in the form of compact discs, include 28 songs based on poems by authors from many countries. It is noteworthy that all the poems, one way or another, tell about how the historical heritage of ancient Samarkand connects with the most creative practice of present-day life, encourages changes for the better and affirms peace through creativity. The purpose of all these projects is to show that the peace museum lives not so much in the past as in the present and the future. Peace has a living human face, its aesthetic image, artistic color, its own poetry, social drama and creativity.

Embodying these messages into actual civil initiatives and projects, the Samarkand Peace Museum organized a number of presentations "Hiroshima-Nagasaki: The Voice of Remembrance and Hope" and other public events introducing a visualized story of the life drama of Sadako Sasaki, who became a symbol of the movement towards a nuclear-free world. The museum activists collected many thousand signatures to support the initiative of the Republic of Uzbekistan for creation of a nuclear-weapon-free zone in Central Asia and in support of the "Appeal from Hiroshima and Nagasaki for a Total Ban and Elimination of Nuclear Weapons". In May 2008, the museum joined the Samarkand stage of the International Bike Peace Ride from Olympia to Beijing, organizing a thematic series of art-peacemaking presentations for its participants.

It is important that the experience of the Samarkand Peace Museum is transformed into a variety of creative practices, expanding not only the geography of international relations and professional cooperation, but also inspiring its partners to new peace-building actions and scientific forums. In this regard it is worth mentioning the recent scientific-educational Russian-Uzbek project "Heritage and Modernity in the Dialogue of Cultures from the Volga to the Zeravshan: Samara and Samarkand" (2016-2017). This project is a continuation of the previously presented edition of "A Concise Encyclopedia of Foreign Samarkandiana: Culture Linking the World" [Ionesov, Ionesov 2014]. The main mission of the forum is to promote rapprochement and reconciliation of cultures, relying on historical and modern artifacts of the peacemaking of the two cities – Samara and Samarkand. The aim of the project is to develop a culture of peace for the service of the regional communities through a dialogue of traditions and innovations, new scenarios of communication between cultural heritage sites and relevant social practices.

Useful cultural developments can also be considered such as socio-educational projects, promoted by the Samara cultural experts, as the "Museum of Home Collections", "Ethno Look", and "Teach Me Peace". With thanks to these initiatives, various peace-building presentations, exhibitions and performances in cultural studies are regularly held at the museum sites of Samara. For example, the "Museum of Home Collections" acts in a form of the temporary exhibitions created by the authors themselves, that on the base of family stories, show how to build peace and harmonize with difficult relationships among people. "Ethno Look" is an annual festival of ethnic cultures, where participants, using various artistic techniques (songs, dances, stories, performances, etc.), share humanistic traditions (images and stories of beauty, virtue and appeasement) of their national community. "Teach Me Peace" is a cultural project for students, in which each

participant prepares not only an example of a visual description of a real conflict, but also develops scenarios of its taming, offering techniques for preventing violence and reconciliation of cultures.

The partnership project "Flowers of Peace" and the accompanying annual flower festival (2008-2016) in Samarkand became a new experience in the design of the aesthetics of peacemaking. Peace in the concept of the festival is like a cultural plant, which must be patiently cultivated and protected. Specially for the festival, the museum's partner - the House-Museum of the poet and educator Orif Gulhani prepared over four thousand copies of 30 varieties of flowers and ornamental plants – they were distributed free of charge to all comers. But with an indispensable condition – the participant should give a promise within the next year to give the shoots from this plant to ten of his acquaintances. Does this not remind us of the specifics of the peace-building process: if you do not transfer peace to another person, it will not come to him/her by itself? Here comes to mind the Oriental wisdom: take what is given and give back what could not be taken (instruction of Sufis). It's necessary to learn to cultivate peace, like flowers, to notice it, artistically decorate and give it to others. To some extent, peace attracts reality through beauty [Ionesov 2015]. Aesthetics of peace are a powerful catalyst for creativity, an indicator of the fullness of life and well-being. What can better embody the peaceful and calming harmony of culture and nature than a carefully cultivated and well-maintained garden?

Possibly, but not by accident, the medieval Samarkand as a talisman protected itself by exhibiting exquisite garden culture – each garden had its own unique style and peace-affirming poetic name: the Ornament of the World Garden (Bag-i Nakshi-Jehan), the Garden of Eden (Bag-i Beshit), the Garden of Contentment (Bug-i Buld), the Garden Captivating the Hearts (Bag-i Dilkusho), the Place of Happiness Garden (Davlet-Abad), the Garden Showing the World (Bag-i-Jehan-Numo), etc. [Pugachenkova 1887: 174]. By the way, the tradition to embody the ideas and images of peace-building in the landscape culture is now actively developing not only in the urban space of Samarkand, but also in other parts of the world.

Among them are the peace parks in Asia: Hiroshima Peace Memorial Park, Nagasaki Peace Park (Japan); Baram Peace Park (Borneo, Malaysia), Peace Park (Labuan, Malaysia), Oush Grab Peace Park (Israel/ Palestine), The Jordan River Peace Park (Jordan/ Israel/ Palestine), Tolerance Park (Jerusalem, Israel); Pacific Rim Parks (Vladivostok, Russia; Jeju Island, Korea; Puerto Princesa, Philippines; Kaohsiung, Taiwan; Yantai, China); Khunjerab (China / Pakistan), UN Peace Park (Kyung Hee University, Suwon, Korea); No Gun Ri Peace Park (Yeongdong, Korea), World Peace Gong Park (Kertalangu, Indonesia), Gallipoli Peace Park (Gallipoli Peninsula, Turkey), Bamijan Peace Park (Bamiyan, Afghanistan), and others (see http:/ /peace.maripo.com/p_parks.htm).

As the project activity of the Samarkand Museum of Peace and Solidarity shows, the promotion of a culture of peace in the Central Asian region becomes more effective through creative appeal to the national traditions and ethnic stereotypes of behavior that are most successfully revealed through art-decorative and social-ceremonial peace-building practices. The culture of peace here is better developed when it comes into contact with the traditional Eastern customs of hospitality, national decorations and collective creativity. For example, the annual traditional holiday Nowruz ("New Day"), celebrated in the East on March 21. This ancient custom serves as an illustrative example of contemporary socio-

cultural design, in which the age-old traditions of hospitality, peace-loving, harmony and beauty are realized by way of festive collective ceremonies to relieve tension and conflicts, appease culture in the context of the most urgent relevant needs of society.

Thus, the Samarkand Peace Museum, using the humanistic experience of Nowruz, has laid a new tradition of revealing the peace-building potential of this national holiday. It is about the project "International Letter Days "Assalom, Nowruz!" ("Hello/ Peace Be with You, Nowruz!"), which annually collects thousands of congratulations, good wishes and proposals from around the world, united by the concern to make the world a better place. Each message is filled with humanistic meaning and it shares with others the most intimate, meaningful and experienced. The main message of this cultural-educational project – through appeal to the peace-creating heritage of Nowruz to launch the idea of the main and essential, salvation for this era of humanity. We'll not think – we'll not understand. We'll not understand – we'll not feel. If we'll not feel it – we're gone. With thanks to this project, it becomes obvious that Nowruz is more than a holiday – it is a whole philosophy or, in other words, a culture of beneficent beauty and pacification of life. The festive culture of Nowruz brings to mind another Sufi wisdom filled with a peacemaking meaning: "Let what is being done for you, be done and do for yourself what you have to do".

Another useful experience of the Samarkand Museum of Peace and Solidarity is related to the promotion of the international language of Esperanto. Esperanto is proposed to be considered as a kind of transnational culture of rapprochement and reconciliation of peoples. It happened so that Esperanto has in fact become the hallmark of the museum. And if in the beginning of the activity of the museum there was a Word, then this Word was in Esperanto. And this is not accidental.

Esperanto, perhaps, can be considered the first global project of universal human communication, proposed and created by one person (Polish humanist Dr. L.L. Zamenhof, 1859-1917) for all people and nations of the planet. In a sense, the Esperanto language fully embodies the main value priorities of the museum peace-building practice – to cultivate peace, to make the distant accessible, to bring people closer together, to expand communication. After all, Esperanto is the only language that was initially predetermined (unlike ethnic languages) to unite people of different nationalities.

At the heart of Esperanto is the focus on simplicity and order. Each phrase in Esperanto seems to bring different languages and peoples together and teaches that only in the synthesis of traditions and cultures peace finds its vitality. And this is seen as another socially significant and culturally enlightening value of the international language of Esperanto in the modern peace-building process.

All these creative possibilities of Esperanto are effectively implemented for more than four decades in various projects and programs of the Samarkand International Friendship Club «Esperanto» (one of the major projects of which was the establishment of the Museum of Peace in Samarkand!), including the international peace exhibitions, workshops, festivals, expeditions, children's art shows, master classes, courses, book presentations, conferences, concerts, recitals, slide films, etc.

Subsequently, in July 2018, the complex project «Esperanto – the language that brings peoples and cultures closer» was successfully convened in Samarkand. Within this project, language courses were accompanied by thematic seminars, lectures,

communicative practices in the context of the urgent global (UN International Decade for the Rapprochement of Cultures) and national (Year of supporting active entrepreneurship, innovative ideas and technologies in Uzbekistan) tasks. It should be noted that the peacemaking resources of Esperanto are now actively used in many other Asian countries, including Japan, China, Korea, Vietnam, Nepal, Tajikistan, etc.

6. Regional Practices of Peace Museums in Asia

Along with the positive experience of the Samarkand International Museum of Peace and Solidarity, other Asian museum practices also seem interesting and instructive. Where the creativity of action and communicative involvement are combined with the traditional values of each specific region, peace as an object of museumification becomes an attractive, accessible, in-demand and useful tool for transforming the everyday life of people. In the modern Asian space there are many examples of how this can be effectively implemented in practice, and when peace, as an abstract concept, is successfully transformed into an actual cultural policy.

Internationally known for its versatile activities, the Kyoto Museum for World Peace (Ritsumeikan University, Japan) demonstrates that it is possible to change the world for the better in a particular region by means of modern technologies and a communicative culture of museumification of samples of universal human values and national memory. Actual project seminars and exhibitions of the museum with eloquent titles "What is PEACE?" (August, 1-2, 2009) and "What Color is Peace?" (October 27 – November, 3, 2005) demonstrate that peace-building is increasingly filled with cultural content and appears as a creative experience and communicative strategy.

In this cultural perspective the developments of the Tehran Peace Museum (Iran) are being carried out. Here are just some of the names of its peacemaking projects "Random Act of Kindness", "CW Oral History", "Peace and Smile", "Phoenix"… As the organizers of the "Act of Kindness" note: "In this project we are trying to promote the culture of peace and kindness through different available means in our society. Examples of what we plan to do are: visiting patients and seniors; handing out food and clothes to homeless people; smiling; offering our skills to people who need them; cleaning public places; giving away ice cream/small toys to children..." [see http://www.tehranpeacemuseum.org/index.php/en/]

Within the "CW Oral History" project our Iranian colleagues preserve interviews with victims of exposure to chemical weapons in order to create an archive of their candid stories, memories and testimonies. Each story is accompanied by sound and video clips with transcripts available in the Persian original and English translation.

The participants of the project "Peace and Smile" are invited to create a peace tour or a road map to areas torn by conflicts and wars, to battle sites and at the same time to visit spiritual centers, wise teachers, mentors and environmental sites. All this in order to learn from the past and better understand the present. Each developed tourist route is accompanied by information and educational materials.

The "Phoenix" project prepares and sends volunteers (including survivors of the horrors of the war) to their communities as ambassadors of peace. They develop special guides for peacemaking, using them to teach other people and offer to conduct a self-guided tour of

the peace museum. It is important that the project participants develop their own design of a peacemaking culture, which is reflected in clothing, printed materials, symbols, decoration of exhibition halls and even in the form of invitation cards.

The cultural focus of peace-building activities is clearly evident in the art-social and educational projects of the Children's Museum for Peace and Human Rights (Karachi, Pakistan). Here, peace-building practices, through simple steps and small actions, promote valuable ideas and accomplishments – the construction of a socially just and stable society where children and young people grow as informed, active and engaged citizens who are able and willing to make a significant positive contribution to their communities. The exhibits of the museum seem to encourage people to share their stories, experiences and decorations about the culture of peace, tolerance and nonviolence, with the help of specialists and volunteers. Such a museum not only lays the traditions of peacemaking, but also actively promotes them in society through various socially significant projects. This makes it possible to make a real difference in life, especially for children, by providing them with the necessary knowledge, introducing them to cultural values and helping them to understand the world. But the main thing for the museum staff is to make sure that every child can develop social responsiveness in relation to human rights, peace, social justice, tolerance and diversity and consequently make a positive contribution to their communities. The culture of peace formed in this way, according to the museum's experts, serves as the largest initial investment to create the basis of a socially fair and tolerant society in Pakistan [see http://cmphr.org/our-vision/].

In this regard, the project activity of the Cambodia Peace Museum and the Center for Peace & Conflict Studies (Siem Reap, Cambodia) appears to be very useful. The programs promoted by these organizations involve in the peacemaking process people directly affected by a dramatic situation, and therefore namely they often possess the necessary knowledge, understanding and experience to determine the best solutions to the problems facing their community. Participants in courses on the prevention of conflict and stressful situations caused by violence learn the methodology of the peace-building service in the context of their life experience of overcoming and survival. The courses prepare the leaders of the new peacemaking, creating the so-called "multiplier effect" – influencing not only those who are trained, but also those that can be affected by the ideas, programs, and political scenarios put forward by the project participants...

A distinctive feature of this peace-building practice is the appeal for information and contact from direct victims of violence. The experiences and recorded voices of living witnesses of war are gathered in a special collection, which is used not only in scientific and educational peacemaking activities, but also in practical work for the prevention and removal of post-traumatic syndromes of victims of violence. The project "Listening to Voices", in the opinion of its authors, contributes to the formation of the so-called trusting movable construction of peace, and prepares for this process leaders who are able to process cultural contexts, social changes and ultimately transform the world and be responsible for it. The organizers of the project also believe that "investing in the leadership capacity of local actors and peace practitioners is essential to carry forward the lessons learned, new attitudes and networks, and to ultimately reducing the possibility of a return to violent conflict. Engaging key

individuals in long-term leadership development increases the sustainability of peace as they apply skills to their own contexts, while also creating a network of strong Asian peace leaders who will carry efforts forward" [see http://www.centrepeaceconflictstudies.org/peace-museum/].

The diverse experience of peacemaking of the Japanese Citizens' Network of Museums for Peace deserves to be mentioned. Perhaps this is the only national network of museums for peace that plays a key role in INMP. Our Japanese colleagues regularly hold their annual meetings, share skills and expertise, publish a newsletter "Muse", etc. An important initiative we should also recognize the new project of Professor Ikuro Anzai "Fukushima Project Team" as an example of a living connection of the past (power plant accident) with the present. It is very significant and not at all accidental that it is Japan that has the largest number of peace museums in the world.

Another promising platform where new peace-building practices are successfully cultivated is the Kanagawa Plaza for Global Citizenship (or "Earth Plaza") in Yokohama (Japan). In the very name of this institution two words are combined: "Earth" and "Tomorrow" (*asu* in Japanese), as if offering a reason to ponder about what will occur to our planet in the future. "Global citizens" are people who think daily about solving global problems, such as peace, the environment and poverty. However, by thinking globally and acting locally, they not only transform the life of their district (prefecture), but also influence the global processes, because in the modern world everything is interconnected. "Earth Plaza" in its projects cultivates the experience of positive interaction between society and nature, the local and the global, the national and the universal in the context of the connection of time and current relevant challenges of our time (see http://www.earthplaza.jp/english/about.html). An important idea is that the past matters to us only in its connection with the present and with an understanding of what humanity can expect in the future if it fails to protect peace by means of culture.

Yet another attraction is the international creative initiative *Peace Mask Project*/ http://www.peacemask.org/, launched by a group of artists and designers from Japan, Korea and the United States. The project combines the efforts of hundreds of volunteers of various professions with the purpose of bringing together and reconciling cultures by referring to the expressive human face in all its diversity, informational content and uniqueness. It appears that this can be done through the art of mask which not only symbolizes peace, but also tells about it. The expression "to take off a mask" in culturological discourse acquires a double meaning of paired opposition: to reveal true appearance (to rip off the mask, to open the face) and to make a mold of the face (to put a mask on, to hide the face). In the individual folds and wrinkles of the human face, the road map of the person's life path, its history and events, experiences, hopes and aspirations are imprinted. Creation of masks and their artistic representation not only unites people through joint creativity, but also opens up creative opportunities for diversity and enhances the significance of the universal human values.

Thus, the unconditional trend of the last decade in the museumification of a culture of peace and nonviolence should be recognized the appeal of Asian museums to communicative strategies of art-visual design of the exhibits of peacemaking. With preservation of the still traditional perception of peace as an opposition to war and the domination of its historical development based on established museum practices, today there is an

obvious transition to a new broad culturological interpretation of the concept of peace and to the conditioned by it understanding of peacemaking as a cultural experience or a culture of peace. The culturological approach significantly separates the boundaries of peace-building activity and defines it as a creative process of transforming and harmonizing life in its admissible fullness and diversity. Peace, first of all, is what cultivates the optimal opportunities and conditions for self-realization of humanity and domesticates nature and culture for an individual.

After all, peacemaking as a social practice has its own recognizable and attractive attributions – lines, contours, colors, shapes, smell, style, manners, experiences, in other words, its social-artistic language, in other words, its own culture. Why not deploy all these benefits and resources in the sphere of museum design? The culture of peace is not a process of passive contemplation, but an active life-affirming practice. Its mission is to generate new values: a word that acts; a smell that has a shape; the color that sounds... In this regard, there is a need to create new peace museums that could capture the most diverse social and aesthetic values of human life. For example, such new peacemaking platforms could be museums of charity, museums of virtue, or goodwill, museums of generosity and hospitality, museums of universal responsiveness... Provided that they will function not as sacred memorial objects, but as open laboratories of creativity of action, co-participation and co-creation for solving urgent problems of our time.

With regard to this, I recall the message of one of the former senior UN officials, a well-known tireless advocate of peace, Dr. Robert Muller (1923-2010) addressed (13.03.1995) to the Samarkand Museum of Peace and Solidarity, in which he drew attention to how important it is for the museum to express clearly the living experience of non-violence and in every possible way to promote through culture the best examples of peacemaking. In this message, Dr. Muller noted that the UN Secretary General U Thant, having returned from a trip abroad, said to him: “In every capital I visit, they take me to a monument of the unknown soldier, but never to the monument of an unknown peacemaker.” Being later the Chancellor of the United Nations University for Peace in Costa Rica, Robert Muller recalled that comment and he wrote: “I remembered this remark of his, and we have now at the University for Peace the first monument to the unknown peacemaker. It would be wonderful if the second place on earth where such a monument would be erected would be Samarkand. Please fulfill this dream of mine, if possible… Let us remain in close touch. A great dream is being born in Samarkand. It will spread to the entire world. May peace bless this entire beautiful planet and all its people”.

7. Conclusion

So, construction of peace-building is always a test and a challenge. It is not worth simplifying the problem or excessively romanticizing it. We are still not fully prepared to separate the culture of peace from the culture of war. War tends to be dressed in the clothes of a peacemaker. And sometimes, under the guise of peace, we unintentionally promote the culture of war and violence. There is too much of war in our thoughts, actions, desires and values.

"Counter-path, that is peace, isn't it...?" – once remarked the outstanding French philosopher Jacques Derrida in his message (30.07.2000) to the Samarkand International Museum of Peace and Solidarity. However, who said that the path in

spite (against the passage) is impossible? After all, peace has one absolute advantage – only it gives a man a chance for salvation.

REFERENCES

Anderson, Gail (ed.) 2012. *Reinventing the Museum: The Evolving Conversation on the Paradigm Shift*. Plymouth: AltaMira Press. – 540 p.

Anzai, Ikuro, Hayashida, Mitsuhiro & Kimura, Akira. 2018. *Making Full Use of the Nuclear Weapons Convention.* (Japanese). Kamogawa Publishing Co.

Anzai, Ikuro, Apsel, Joyce and Mehdi, Syed Sikander, eds.2008. *Museums for Peace: Past, Present and Future* / The Organizing Committee of the Sixth International Conference of Museums for Peace. Kyoto (Japan): INMP, Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University.

Anzai, Ikuro. *Scientific and Social Aspects of the Fukushima Nuclear Disaster.* Translated by Stephen Suloway, Anzai Science and Peace Office, Fukushima Project for a Safer Future, 2012.

Apsel, Joyce. 2016. *Introducing Peace Museums*. London and New York: Routledge. – 236 p.

Arts Council England. 2013. *Great art and culture for everyone: Ten years strategic framework 2010-2020.* Available at http://www.artscouncil.org.uk/great-art-and-culture-everyone American Association of Museums, last accessed January 10, 2018.

Baudrillard, Jean. *Paroli. Ot Fragmenta k Tselomu* Passwords. From the Fragment to the Whole (In Russian). Yekaterinburg: Faktoriya, 2006. – 200 p.

Barrett, Clive and Apsel, Joyce (eds). 2012. *Museums for Peace: Transforming Cultures.* Hague (The Netherlands): INMP. – 270 p.

Bedford, Leslie. 2014. *The art of museum exhibitions: How story and imagination create aesthetic experiences*. New York: Left Coast Press. –168 p.

Bensaid, Daniel. 2011. *La Spectacle, Stade Ultime du Fetichisme de la Marchandise.* Editions Lignes. – 144 p.

Biboletova, Merem, Babushis, Elena, Clark, Olga, Morozova, Alevtina and Solovyova, Inna. 2010. *Enjoy English*. Textbook for School. Second Edition. – Obninsk, TITUL Publishers. – 240 p.

Bishop, Claire. 2013. *Radical Museology, or What's "Contemporary" in Museums of Contemporary Art?* Dan Perjovschi and Koenig Books. – 88 p.

Brabandere, Luc de. 2010. *Zabytaya Storona Peremen. Iskusstvo Sozdaniya Innovatsiy / The Forgotten Side of Changes.* The Art of Creation of Innovations. Achieving Greater Creativity through Changes in Perception (In Russian). – Moscow: Protext. – 203 p.

Carey, James W. 1989. *Communication as Culture: Essays on Media and Society*, London: Routledge Press. – 256 p.

Conflict Transformation through Culture, Peace-Building and the Arts. 2014. *Salzburg Global Seminar.* Session 532 Salzburg, April 6 to 10, 2014. Available at http://www.salzburgglobal.org/fileadmin/user_upload/Documents/2010-2019/2014/532/SalzburgGlobal_Report_532.pdf, last accessed January 10, 2018.

Crooke, Elizabeth M. 2006. "Museums and Community" in Sharon Macdonald (ed). *A Companion to Museum Studies*. Oxford: Blackwell. – P. 170-185.

Crossick, Geoffrey and Kaszynska, Patrycja. 2016. *Understanding the value of arts and culture: the AHRC Cultural Value Project.* Available at http://www.ahrc.ac.uk/documents/publications/cultural-value-project-final-report/ last accessed January 8, 2018.

Dubiel, Helmut and Motzkin, Gabriel (eds.). 2004. *The Lesser Evil: Moral Approaches to Genocide Practices (Totalitarianism Movements and Political Religions)*. Routledge; 1st Edition. (June 17, 2004). – 240 p.

Firdousi. *Shakhname.* 1957. Tom 1. Ot Nachala Poemy Do Skazaniya o Sokhrabe/ From the Beginning of the Poem to the Tale of Sohrab. (In Russian). Literaturnye Pamyatniki. Izdanie podgotovili Ts.B. Banu, A. Lakhuti, A.A. Starikov. – Moscow: Academiya Nauk SSSR. – 698 p.

Genoway, Hugh H. (ed). 2006. *Museum philosophy for the twenty-first century*. Altamira Press. – 310 p.

Giddens, Anthony.2004. *Uskolzauyschiy Mir. Kak Globalizatsiya Menyaet Nashu Zhizn / Runaway World. How Globalisation is Reshaping our Lives* (In Russian). – Moscow: Ves' Mir. – 120 p.

Golding, Viv. and Modest, Wayne (eds). 2013. *Museums and Communities: Curators, Collections, Collaboration*. London: Bloomsbury Academic. – 288 p.

Groys, Boris. 2015. *O Novom. Opyt Ekonomiki Kultury / About the New. The Experience of Cultural Economics* (In Russian). – Moscow: Ad Marginem Press (Garage Pro). – 240 p.

Harman, Graham. 2005. *Guerrilla Metaphysics: Phenomenology and the Carpentry of Things* / Open Court Publishing, Chicago and La Salle, Illinois, 2005. – 283 p.

Hein, George. 2012. *Progressive Museum Practice: John Dewey and Democracy*. Walnut Creek, CA: Left Coast Press. – 255 p.

Ionesov, Anatoly I. and Ionesov, Vladimir I. 2015. "Muzey kak mirotvorchestvo: sposobny li artefakty kultury nas primirit'?" / "Museum as peacemaking: can the artifacts of culture reconcile us? *Vestnik Chelyabinskogo gosudastvennogo universiteta,* No. 2. – P.75-82.

Ionesov, Anatoly I. and Ionesov, Vladimir I. 2017. "What Can Be Done in 25 Years or the Organization that Gave Peace a Chance". "*INMP Newsletter*", No. 18 March 2017, Special Issue, International Network of Museums for Peace, Hague. 59-60.

Ionesov, Anatoly I. and Ionesov, Vladimir I. 2014. *Malaya entsiklopediya zarubezhnoy Samarkandiany: kultura, ob'yedinyauschaya mir* / A Concise Encyclopedia of Foreign Samarkandiana: Culture Linking the World. Samara-Samarkand: Vek #21. – 483 p.

Ionesov, Vladimir I. 2015. "Aesthetic resources of social survival and sustainable development: The Beauty in Culture". *Scientific Culture*, Vol. 1, No 2, (2015). – P. 33-38.

Ionesov, Vladimir I. and Kurulenko, Elleonora A. 2013. "Kultura kak mirotvorchestvo i sotsialnoe podvizhnichestvo: regionalnye proyektnye praktiki" / "Culture as peacemaking and social devotion: regional project practices", *Kulturologicheskiy zhurnal,* 1. Available at http://cr-journal.ru/files/file/04_2014_19_17_54_1397488674.pdf , last accessed August 16, 2018.

Ionesov, Vladimir I. and Kurulenko, Elleonora A. 2015. "Things as Characters of Culture: Symbolic Nature and

Meanings of Material Objects in Changing World". *Scientific Culture*, Vol. 1, No 3, (2015). – P.43-58.

Ionesov, Vladimir I. 2015. Heritage and Museum Artefacts as Cultural Resource for Creative Practice in Social Transformation // *Actas del Segundo Congreso Internacional de Buenas Prácticas en Patrimonio Mundial: Personas y comunidades* / Castillo Mena, Alicia R. (ed.) (2015)/ Proceedings of 2nd International Conference on Best Practices in World Heritage: People and Communities, 27 April - 5 May, 2015, Menorca, Spain, Universidad Complutense de Madrid, Servicio de Publicaciones, Madrid. 2015. – P.156-166.

Jarman, Derek. 2017. *Khroma / Chrome.* Book of Colour. (In Russian). – Moscow: Ad

Marginem Press (Garage Pro). – 176 p.

Jenkins, Henry. 2006. *Convergence Culture: Where Old and New Media Collide.* New York: New York University Press. – 308 p.

Khateri, Shahriar. 2008. "The Tehran Peace Museum (Iran)", *Peace Museums of the World*, October 17. *Available at http://www.hiroshimapeacemedia.jp/mediacenter_d/w_museum/20081017175408738_en.html, last accessed August 15, 2018.*

Kimijima, Akihiko and Jain, Vidya (eds). 2013. *New Paradigms of Peace Research: The Asia-Pacific Context.* Published by Rawat Publication, Jaipur, Rajasthan, 2013. – 240 p.

Lindauer, Margaret. 2006. "The Critical Museum Visitor", in Janet Marstine (ed.), *New Museum Theory and Practice: An Introduction*, Oxford: Blackwell Publishing Ltd. Chapter 8: 203-225.

Mehdi, Syed Sikander. *A Peace Museum on the Wagah Border*. In: South Asian Journal, vol. 10, 2005. – P.116-126.

McKenns-Cress, Polly and Kamien, Janet. 2013. *Creating Exhibitions: Collaboration in the Planning, Development, and Design of Innovative Experiences*. John Wiley & Sons, Inc., Hoboken, New Jersey. – 320 p.

McLean Kathleen. 1993. *Planning for People in Museum Exhibitions.* Washington D.C.: Association of Science and Technology Centers. – 196 p.

McLean Kathleen, Pollock, Wendy (eds.). 2007. *Visitor Voices in Museum Exhibitions.* Washington D.C.: Association of Science and Technology Centers. – 164 p.

Mikhelkevich, Valentin N. 2017. "Vmesto vvedeniya" / Instead of an introduction (In Russian). – Edited by Vladimir Ionesov. *Heritage and Modernity in the Dialogue of Cultures from the Volga to the Zeravshan: Samara-Samarkand*. – Samara: Samara State Institute of Culture. – P. 26-33.

Norris, Linda and Tisdale, Rainey. 2013. *Creativity in Museum Practice*. London and New York: Routledge. – 247 p.

Pachter, Marc and Landry, Charles. 2001. *Culture at the Crossroads. Culture and Cultural Institutions at the 21st Century.* Comedia. – 113 p.

Pugachenkova, Galina A. 1987. *Iz Khudozhestvenoy Sokrovischnitsy Srednego Vostoka / From the Art Treasure of the Middle East* (In Russian). – Tashkent, Izdatel'stvo literatury i iskusstva imeni Gafura Gulyama. – 224 p.

Roberts, Lisa. 1997. *From knowledge to narrative. Educators and the Changing Museum.* Washington, DC: Smithsonian Institution. – 216 p.

Romano, Claude. 2015. *L'Aventure Temporelle: Trois Essais Pour Introduire a L'Hermeneutigue Evenementiale.* Presses Universitaires de France. – 336 p.

Schirch, Lisa. 2004. *Ritual and Symbol in Peacebuilding*, Bloomfield, CT: Kumarian Press, Kumarian Press. – 224 p.

Schwab, Klaus M. 2017. *Chetvertaya Promyshlennaya Revolutsiya* / The Fourth Industrial Revolution (In Russian). – Moscow: EKSMO. – 288 p.

Shirky, Clay. 2008. *Here Comes Everybody: The Power of Organizing without Organizations.* – New York: Penguin Press. – 327 p.

Shiva, Vandana. 2013. *Making Peace with the Earth.* – Chicago: Pluto Press. – 288 p.

Simon, Nina. 2010. *The Participatory Museum.* – Santa Cruz (CA): MUZEUM. – 388 p.

Simon, Nina. 2017. *Partitsipatornyi Musey / The Participatory Museum* (In Russian). – Moscow: Ad Marginem Press (Garage Pro). – 368 p.

Smith, Laurajane. 2006. *The Uses of Heritage*. London: Routledge. – 351 p.

Sontag, Susan. 2003. *Regarding the Pain of Others. Farrar, Straus and Giroux*. – New York: The Wylie Agency. The Estate of Susan Sontag. – 108 p.

Triandis, Harry C. 2005. *Culture and Social Behavior*. University of Illinois. McGraw-Hill, Inc. – 320 p.

Tsuboi, Chikara. 1999. *Proposal for Further Development of the International Conference of Peace Museums with Special reference to the Definition and Categorisation of Peace Museums.* Peter van den Dungen & Terence Duffy (eds.) op.cit.

van den Dungen, Peter and Yamane, Kazuyo, eds. 2015. "Special Issue: Peace Education Through Peace Museums". *Journal of Peace Education* (December): 213–284.

van den Dungen, Peter. 2016. "Abolishing Nuclear Weapons through Anti-Atomic Bomb Museums", *Peace Review*, 28:3, 326-333.

Weil, Stephen E. 2002. *Making Museums Matter*. Washington: Smithsonian Books. – 288 p.

Yamane, Kazuyo. 1996. "Local Efforts for Creating Nonviolent Futures: A Case of Kochi, Japan". *Social Alternatives,* vol. 15, no. 3. – P.46-49

Yamane, Kazuyo. 2009 a. "*Moving Beyond the War Memorial Museum". Peace Forum. Peace Now and Then*, vol. 24, No. 34. – P. 75-84.

Yamane, Kazuyo. 2009 b. Peace Education through Peace Museums / *International Security, Peace, Development and Environment* – Volume II. Edited by Ursula Oswald Spring. – EOLSS Publications/ UNESCO, 2009. – Oxford, UK. (– 358 p.). – P. 94-164.

Yamane, Kazuyo. 2006. *Peace Museums in Japan: The Controversial Exhibits on Japan's Aggression at Peace Museums and Citizens' Efforts for Peace and Reconciliation.* University of Bradford, Department of Peace Studies, PhD Thesis.

Acknowledgements

The author thanks David Porter (UK) for his diligent proofreading of this paper and helpful suggestions, and also Anatoly I. Ionesov (Uzbekistan) for submitting useful materials on peace museums in Asia, important remarks and valuable clarifications.